

序文

札幌管区気象台の前身となる札幌測候所が気象観測を開始してから、本年令和8年（2026年）で150年を迎える。

明治2年（1869年）に開拓使が設置された頃から、北海道の開拓における気象情報の必要性は徐々に認識されるようになった。当初の観測は、招へい外国人の助力を受けながら行われた簡易的なものであった。こうした取組を踏まえ、明治9年（1876年）9月1日、石狩国札幌区東創成通り（現在の札幌市中央区南2条東1丁目）に設けられた教師館において、札幌農学校教師ウィリアム・ホイラーにより気象業務が体系的な形として整えられ、本邦3番目となる気象観測が開始された。これが札幌における気象観測の本格的な始まりである。同年12月には開拓使民事局の事業として札幌測候所による観測が本格化し、その後、本道各地へ測候所が設置された。昭和12年（1937年）から13年（1938年）にかけては順次国営へ移管され、昭和14年（1939年）11月に現在の札幌管区気象台へと改称された。当台では昭和51年（1976年）に『札幌気象百年史』を刊行しており、本書はその後の半世紀を対象とする続編である。

この間、北海道では多様な自然災害が発生し、当台はその都度、観測・解析技術の向上、防災気象情報の発信強化、関係機関との連携を通じて防災対応の充実に努めてきた。昭和52年（1977年）の有珠山噴火では、常時観測体制によって前兆となる地震活動を的確に把握し、自治体の避難判断を支援した。平成12年（2000年）の同山の噴火では、火山噴火予知連絡会の見解を踏まえ、気象庁として初めて噴火前に緊急火山情報を発表し、早期避難に寄与した。平成25年（2013年）の北海道東部における暴風雪災害による被害を契機に、「数年に一度の猛吹雪」「外出は控えてください」といった分かりやすい表現を用いた情報発信を開始し、暴風雪時の被害軽減に努めている。平成28年（2016年）8月、北海道に1か月で3個もの台風が上陸した際には、警戒を呼びかけるため、当台主催の台風説明会に北海道の担当者にも同席いただき、道民に向けて危機感を伝えていただくなど、減災に向けた連携した取組を行った。また、平成30年（2018年）の北海道胆振東部地震では、創設されたばかり

の気象庁防災対応支援チーム（JETT）を速やかに派遣し、被災自治体の防災対応、救助活動、復旧への支援を行った。その後も、大規模災害の発生時等には JETT による気象解説を行うなど、関係機関との連携強化を進めている。

令和8年（2026年）9月1日

